

## 茶の湯の心で

表千家家元

猶有斎 千 宗左

新型コロナウイルス感染症でお亡くなりになられた方のご冥福を謹んでお祈り申し上げます。また罹患された方々にお見舞いを申し上げ一日も早いご回復を願っております。

そして、医療の最前線で、また私たちのインフラを支えるため、日々ご尽力いただいている関係の皆さまには心から敬意と感謝の意を表します。

「一座建立」という言葉があります。もとは能楽の言葉ですが、茶会において亭主と客のお互いが相手を敬い、一体となることで茶会的一座が成り立つというものです。

茶の湯は「もてなしの文化」ともいわれます。もてなしというと亭主から客への一方通行のものをイメージしがちでしょう。実際に茶会に客を招く亭主は、客のために心を尽くしてもてなします。一方で、客の方もそうした亭主の心を真摯に受け止め、敬意を払って茶会にのぞむことで主客の心が通い合うのです。

日本の伝統文化というジャンルであっても、茶の湯には生け花のような「作品」はありませんし、また能や歌舞伎のような「舞台芸能」でもありません。

茶会では亭主には亭主としての役割があり、客にもまた、茶会の中で果たすべき役割がある、そうして主客がそれぞれの役割を果たして共同で作り上げる「一座」こそが、茶の湯の「作品」であり「舞台」なのです。

いま述べたことは茶道に関してのことですが、これは社会の縮図でもあります。老若男女問わず、私たちにはこの社会の中で果たすべき役割があります。子供であればよく学びよく遊ぶ、ということでしょうし、学生であれば学問やスポーツ、趣味などを通して様々なことを経験し、知識を深め、自身の進むべき道を模索するというでしょう。社会に出れば、家庭で、仕事場で一人一人が求められる役割があるはずで、そうして一人一人がそれぞれの責任と向き合うことで、社会という大きな「一座」が成り立つのだと思います。

いま、この感染症による危機という中で私たちに求められていることは、「不要不急の外出を控える」「人と人との接触を極力減らす」ということです。

緊急事態宣言の延長が決まり、それぞれの立場で厳しい道がさらに続きますが、私たち一人一人がこの果たすべき役割を果たし、お互いに支えあうことで事態が収束に向かい、やがて元通りの日常が戻ってくるのだと信じています。

一日も早くそうした日常が訪れることを願いますし、その中で一服のお茶を楽しむことの喜びをかみしめたいものです。

令和二年五月四日